

特別講演

1日目 10月20日(木) 14:30 ~ 15:30

第1会場(福井フェニックス・プラザ 1F 大ホール)

人間とは何か チンパンジー研究から見えてきたこと

京都大学豊長類研究所 思考言語分野 教授 松沢 哲郎

座長 野口 正人(福井赤十字病院 院長)

特別講演

人間とは何か：チンパンジー研究から見えてきたこと



京都大学豊長類研究所 思考言語分野 教授

まつざわ てつろう
松沢 哲郎

【略歴】

- 1973年 京都大学文学部哲学科 卒業
- 1976年 京都大学大学院文学研究科博士課程中退、豊長類研究所助手
- 1987年 同・助教授
- 1993年 同・教授
- 2006年 同・所長 現在に至る

人間の体が進化の産物であるのと同様に、人間の心も進化の産物である。そうであれば、人間の親子関係も子育ても教育も進化の産物である。とはいえ、骨や歯は化石として残るが、親子関係や子育ては化石としては残らない。そこで、共通祖先から分かれた人間以外の動物の子育てを知ることが重要だ。共通する部分は祖先から受け継いだものであり、違う部分はそれぞれの進化の過程で生み出されたと考えられる。人間にもっとも近縁なチンパンジーを比較対象にして、人間の親子関係と子育ての進化を考えたい。日々の暮らしのなかで、ふだん何気なく見過ごされがちな風景がある。子どもを抱いた母親の姿を想像してみよう。そこに、父親がいる。孫の世話をするおばあさんがいる。赤ん坊には、2-3歳上の兄姉がいる。あるいは年子のこともあるだろう。叔母や親せきの者が子どもの世話をし、あるいは親しいご近所の人々が手助けする。これらすべてがチンパンジーには無い。人間に特有な子育てのしかたなのである。母親が子どもの顔を覗き込んであやす、眼と眼があってほほ笑みあう。がらがらを顔の前で振る。イナイイナイバアをする。あかんぼうが声をたてて笑う。生後半年もすると子どもに離乳食を与える。離乳させて次の子どもを産んで、手のかかる複数の乳幼児を同時に育てる。これも人間を特徴づけるふるまいだ。そもそも「親が子どもを育てる」のはあたりまえのように

思える。しかし、この地球上に生息する数百万種とも数千万種とも呼ばれる生物のありようを眺めてみると、親子関係の基本は「親は子どもを育てない」である。鮭はいくらを育てないし、蛙もおたまじゃくしの面倒をみない。わずかな例外はあるが、魚類や両生類は卵を産みっぱなしで、それが親子関係の基本だといえる。約38億年前、地球に生命が誕生した。長い間、子育ての基本は産みっぱなしだった。しかし、約3億年前に、哺乳類と鳥類と一部の恐竜の共通祖先にあたる生物が、親が子どもに投資を始めたのである。つまり鳥は卵を温め、ひなに餌を運ぶ。哺乳類は乳で子を育てる。では人間を含めたサルの仲間、すなわち霊長類の子育ての特徴は何かというと、「子は親にしがみつき、親が子を抱く」ことにある。手があるからだ。四肢の末端でつかむ。4つの手をもつサル類が、人間の進化の過程で「足」を生み出した。直立して手が自由になったのではない。足ができたのである。人間の親子は「しがみつく・抱く」ではないユニークな親子関係を発達させた。親子が離れている。あかんぼうは仰向けの姿勢で安定している。直立2足歩行ではなく、仰向けの姿勢が人間を進化させた。仰向けで、豊かな対面コミュニケーションがあり、声を交わし、手で物を操る。チンパンジーとの比較を通じて見えてきた、人間の本性についてお話したい。

参考文献：松沢哲郎（2011）『想像するちから』岩波書店

松沢哲郎編（2010）『人間とは何か』岩波書店